



小鮎公民館から見た大山
(撮影：小林会員)

令和5年12月号 Vol. 236
(2023年)

発行：令和5年12月9日

あつぎ観光ボランティアガイド協会

ホームページ <http://atugikanvola.sakura.ne.jp>

メールアドレス atugikanvola@yahoo.co.jp

発行責任者 会長 田頭 文昭 編集担当者 澤田 正弘

《宮ヶ瀬の紅葉ハイキング》

行事区分：企画ガイド（ハイキング）

日 時：11月29日（水）9：20～15：00

場 所：宮ヶ瀬湖周辺

参加者：一般19名、会員8名

秋晴れの日、楽しいハイキングが出来ました。本厚木駅北口からバスに乗り、愛川大橋で下車、そこから宮ヶ瀬湖の石小屋ダム上の広場まで歩き、そこで参加者のチェック、集金、注意事項の説明がありました。



そこから宮ヶ瀬ダムの下へ移動し、今年最終日となった「観光放流」を11時から6分間見学しました。初めて見たという参加者もいて、放流の迫力と水しぶきで大感激でした。そこからエレベーターに乗りダムの上へ移動しました。

水とエネルギー館では25分間の自由見学。湖底となる前の家などの写真が掲示されていました。水没する地域の281世帯、1136人の移転によって、2000年（平成12年）に宮ヶ瀬ダムが完成しました。

ダム上通路の展望塔に登ると東側には横浜のランドマークタワーが小さく見えました。また北西側には、昨年のハイキングで登った時の権現平（南山）への稜線を確認する事が出来ました。あいかわ公園の「風の丘」へ移動し、広々ときれいに手入れされた芝生の上で、良い景色を見ながら昼食をとりました。



服部牧場では牛舎の中に沢山の乳牛がいました。1週間前に生まれた3匹の子牛も順調に育っています。売店ではここで採れた牛乳を使った新鮮なソフトクリーム、ジェラートを買って食べました。馬の放牧場では、会員が持参したダイコンの葉を皆で食べさせました。愛川大橋経由で半原のバス停に全員無事にたどり着き、バスで帰途につきました。
(澤田 記)

《秋季入込観光客調査》

行事区分：行事支援

日 時：11月5日（日）9：00～16：00

場 所：厚木市内5拠点

参加者：10名

広沢寺温泉（七沢観光協会駐車場）

あいにくの曇り空でしたが、気温は20℃を超えていました。8時10分頃広沢寺駐車場に到着すると、早くも6台の車が駐車中でした。滑岩でロッククライミングをするグループでした。空いていた駐車場も次第に満車となり、隣の駐車場に車が入り始めました。まず滑岩アタックチーム10名ほどが出発。このチームは最後まで戻って来ませんでした。きっと思いっきり岩場を楽しんだことでしょう。次は鐘ヶ嶽を目指す人々、ほとんどが単独登頂を目指していました。ヤマビルの情報は完璧です。「もう（ヤマビルは）いないよね」の確認に、ご用心のアドバイスとヤマビルキラーのサービスを提供。日向山・見城縦走に臨んだ単独登山1名。案内地図の提供と道案内を聞いて安心して出発して行きました。



その他の人々は“とりあえず来ました”という方々。大釜弁財天コースや二の足林道コースをご案内しました。特に山の神隧道については真っ暗な闇であることを強調。昼前や午後3時頃まではマス釣り場を目指す家族連れが多かったです。皆さんマスやイワナの釣りを楽しみ、塩焼きに大満足でした。3時過ぎには車で玉翠楼の日帰り入浴を楽しむ観光客が多かったです。

3時ごろに東京からバイクで一人旅のお嬢さん。なんと鐘ヶ嶽に登りたいとのこと、さすがに、登頂にかかる往復の時間の説明をして、暗くなるのが早いことなどを丁寧にアドバイス。今からでは、七沢森林公園でしたら大丈夫とお勧め。「また来ます」の言葉を残して去って行きました。長く暑い夏でしたが、さすがに広沢寺温泉のあたりはイロハモミジなどの紅葉が30%ほどに進んで、紅葉シーズンを感じさせました。（横山 記）

七沢温泉（七扇駐車場）

行楽の秋の三連休で最終日の入込み調査でした。始めたばかりの9時台では通過する車のみで歩行者はいません。10時過ぎになってやっとハイキングらしき若いカップルを見つけアンケートがもらえました。11時頃から徐々に増えはじめ、東京や横浜からのハイキングや入浴の方やツリークロスアドベンチャーの家族が見え、資料や地図をお渡しする事が出来ました。



七沢荘 玄関

七沢に来た茅ヶ崎の方には日帰り入浴を紹介致しました。またハザードランプを付け停車中の方には足を運び「何かお困りですか」とお尋ねしてそれなりの資料を差し上げ喜んでもらえました。

8月にリニューアルオープンしたパワースポットのある「七沢荘」、そして世代交代に伴い名称変更した「七扇」（旧：盛楽苑）は七沢の七と家紋の扇を組み

合わせて命名されたそうです。どちらも価格変更にもかかわらずお客様には人気がありました。面白かったのはアンケートに答えて下さった方が無料の柿の置き場所を教えて下さり、帰りにゲットすることが出来た事です。

観光案内所の方や会員の方からも差し入れがあり、また柿のお土産付きの入込み調査でしたが、お客様の声でバスの便を増やして欲しいと言うのがありました。いつもよりずっと少ないこの人出では無理だろうと寂しく感じました。（佐々木 記）

七沢森林公園（出会いの広場）

秋のくすんだ緑の中に、赤や黄色の葉が彩りを添える連休最終日の森林公園。曇り空のせいでしょうか…朝から犬の散歩やご家族連れその他、自然観察会の参加者や自主イベント（写真撮影会が企画されていました）の関係者など、多くの方が訪れているにも関わらず、枯れ葉がカラカラと音を立てて転がる寂しい様子でした。しかしお天気の回復と共に、静かだった園内もお子さんたちの元気な声が響き、また可愛らしいワンコとご主人の笑顔や高齢のご夫婦がのんびり散歩をされる様子など、心温まる風景が戻ってきました。



入込調査の際、来園された方から園内外問わず多くのご質問をお受けします。園内については具体的な場所の他、ベビーカーで行けるルートや、簡単に登れるコースなど、様々な内容がありますが、その中で「（予想以上に大変だったので）高低差の分かる地図はありますか」というご質問を頂きました。難しいとは思いますが、こういったご質問にも具体的に対応できるようになればと思います。（毛利 記）

飯山温泉（中飯山自治会館）

庫裡橋を渡ったところに中飯山自治会館がありその場所をお借りして入込調査を行いました。11月初旬としては気温が24度と高めでしたが裏の畑には色とりどりの「ざる菊」が咲き誇り秋を告げていました。飯山には白山ハイキングコースがあり秋晴れの良い天気でしたのでハイカーが多いのではと思っていましたがそのような方は目に止まらず意外でした。



庫裡橋を渡って右に曲がり「ざる菊」を見に行く方、まっすぐ長谷寺方面に向かう方を、カウンターを使い相方と一時間交代で車と人の流れを調査しました。4人の方からアンケートを取りましたが相模原、伊勢原、川崎、平塚と市外から来ている人が多いのが意外でした。（成田 記）

相模川三川合流地点（青少年広場）

天気予報では、午後から日差しも強く夏日の延長で熱中症を心配しての調査活動と思われました。結果としては、終日曇天で風も微風でパンフレットの飛散もなく快適でした。河川敷では、約千台と思われる個人的に改造されたような二輪車（有名なハーレー等）や、旧式の改造4輪車など爆音集うイベントが早朝より開催され、大変賑やかでした。参加者には、関東一円や隣接県のナンバープレートを装着した、遠距離からの来厚車両が多かったです。会場には、地方特産の食べ物出店テントも張られ賑わっていました。

従って、カウント用紙記入など集計に難儀することもありました。

テニスコートや野球場も終日盛況でした。球技見学者は、多目的広場同様、暑さ情報もあり日陰ベンチで休息する都内の数家族程度でした。

多目的広場にあるトイレの行列に、管理棟トイレの利用案内もさせて頂きました。アンケートは、イベント会場内へ行き、記念品のある分だけ協力頂きました。調査中、観光協会や会長さんからの激励や飲食物の差し入れに感謝です。



(高橋 記)



会員投稿

《 相模原の「渡辺崋山展」に参加して 》

眞野 晃一

「渡辺崋山展・游相日記より」を相模原市相武台公民館で開催中との記事を見て9月10日に訪問しました。同日が展示最終日で午後には厚木郷土博物館山岡学芸員による「厚木六勝について」講演会が予定されていました。

私には「崋山といえば厚木」のイメージで、相武台開催に大変興味がありましたが会場にお伺いしてその疑問が解消しました。今回の企画は永年渡辺崋山を研究され、相武台在住の郷土史家涌田佑(わくたゆう)氏(神奈川近代文学館評議員)の研究成果を中心にまとめられたものでした。

同氏は「平成校注「游相日記」 渡辺崋山、天保2年大山道の旅」(相模経済新聞社2004年刊)等の著書もあり、「崋山と県央地区」等のテーマで相模原市や近隣市で歴史文化講座を主宰され会場にも講座の生徒さん達と思われる方々も多数来場されていました。

当日涌田佑氏(94歳)も会場に来られて最後にご挨拶をされました、実にかくしゃくたるもので 言語明瞭 理路整然 大変素晴らしいまとめのご挨拶をされておられました。

私も、多分ご参加の皆様も「あんな風に歳が取れたらいいな…」と感じられたのではないかと思います。

会場には「崋山と游相日記」をテーマにした崋山の生涯と事績が大小約百枚の手書きパネルで解説され、生い立ちから自刃までの物語が大変分かりやすく展示されていました。

なかでも「厚木の渡し」や「万年屋跡」については渡船場と万年屋跡の石碑が拓本化され、実物大の渡船場記念碑の迫力ある拓本展示が来場者の目を引いていました。

また近年個人宅で発見され崋山晩年の作品といわれている「相模川砂灘漁之図(複製)」掛け軸も展示され、相模川で鵜を使った漁の様子が描かれて珍しいものでした。(涌田氏の著書によると「江戸時代相模川の田名から下流では、鵜による漁がおこなわれていたようです…」)

山岡学芸員の講演会は随所にユーモアを交えた話もあり熱心なお客さまで満席大盛り上がりでした。出席者から「なぜ厚木六勝なのか?」(日本三景、金沢八景、はあるが確かに六はあまり聞かない)の質問に「崋山は斎藤鐘助から厚木の名勝6か所を依頼されたので 六勝になっ

たのだと思います」という回答でした。游相日記の最後の部分に記述されていますが、ガイド時にも六勝を依頼された点を付け加えることが必要と感じました。

また 現在米国ハーバード美術館が所蔵している「厚木六勝図」には よく見ると一部絵具を使って彩色された部分があるようで、山岡氏から「六勝図は春夏秋冬を表現しているのではないか?と思われる」という興味深い話もありました。

観ボラ使用の六勝図は、大正期に写真撮影されたと思われる白黒写真の拡大版を使用してガイドをしています。今後の華山六勝図のガイド時には、新たな話題が加わる興味深い講演会でした。六勝図の各季節推定はまたの機会に。

<かながわガイド協議会 合同研修・交流会>

行事区分：外部研修

日 時：11月28日（火） 10:00～15:30

場 所：横浜市神奈川公会堂

参加者：会員3名

合同研修会は、17団体74名が参加しました。協議会会長、県国際観光局観光課副課長の挨拶の後、横浜市歴史博物館主任学芸員小林紀子氏による「史料から見る神奈川宿」と題する講演がありました。

神奈川宿は、人口5793人（天保14年）を有し、小田原宿の人口が5400人であったことから、その大きさが偲ばれます。街道が海に面し、茶屋で景色を楽しみ、新鮮な魚を味わえたそうです。講演では「神奈川駅中図会」（文政6年）、「金川砂子」（文政7年）、「江戸名所図会」（天保5年）、「細見神奈川絵図」（天保15年）などの画を用いて、当時の宿場の様子を説明していただきました。

神奈川宿は、浦島伝説の地で観福寺は浦島寺と呼ばれ、浦島太郎が竜宮から持ち帰ったと伝えられる観音像を本尊とし、浦島太郎父子の墓があり、賑わったといひます。名所として注目されてきたことで、文政4年（1815年）寄付を募って整備し、絵図を見ると石段の整備やお堂の増加など景色の変化がよくわかりました。観福寺は明治初年に火災で焼失し、観音像は神奈川宿内の慶運寺に移されました。

午後の交流会は、「神奈川宿」ウォークで東神奈川駅から横浜駅まで約3kmを歩きました。8～9名で班を作り、「神奈川区いまむかしガイドの会」で各班に1名ガイドを付けていただき、途中2～3名が要所で交通整理にあたっていました。

あつぎは、横浜シティガイド、鶴見見どころガイドの会、かながわガイド協議会の皆さんと同じ班で歩きました。ガイドの方はマイクを使い、イメージしやすいようたくさんの写真や図を用い、説明してくださいました。

東神奈川を出るとすぐ、京急の仲木戸駅の駅名が京急東神奈川駅に変わっていました。ここで仲木戸の由来がこのあたりに将軍の宿泊施設である神奈川御殿があり、そこに木戸を作って警固していたことから、仲木戸の地名となったそうです。神奈川小学校では、このあたりにあった上無川（かみなしがわ）という小さな川の「み」と「し」が抜けて神奈



川となったとのこと。小さな川で上流がないので上無川だそうです。神奈川の意外な由来にびっくりです。

熊野神社は、関東大震災や戦災で被災した神社ですが、嘉永年間鶴見の石工飯島吉六作の大きな狛犬がありました。コンクリートで補修されていましたが、これは戦後境内が米軍に接収され、狛犬は鶴見川に埋められていたとか。狛犬を掘り出したとき損傷がひどく、



コンクリートで補修したそうです。

神奈川宿には、多くの寺がありますが、横浜開港後外国人の住宅や領事館等になっていたそうです。成佛寺はアメリカ人宣教師ヘボン博士や宣教師一家が住み、浦島太郎が竜宮から持ち帰った観音像を安置する慶運寺はフランス領事館、浄瀧寺はイギリス領事館、宗興寺はヘボン博士の施療所、甚行寺は一時フランス公使館が置かれました。本覚寺はアメリカ領事館となりましたが、これは、高台にあり、眼下に海を見下ろす、この寺にアメリカがいち早く目をつけこの寺を要望したそうです。今では海は見えませんが、見晴らしは最高です。

ここから台町の坂を上ります。安藤広重の東海道五十三次神奈川台之景に描かれた場所です。街道の坂道に旅籠や店が並び、その向こうは海。街道は海に面した切り立った崖沿いに通っていたのです。今は埋め立てられ、ビルが立ち並んでいますが、この崖をおり、地形を実感。昔海だった地に降りると目の前に横浜駅西口のビル群が広がっていました。わずか3kmのなかに見どころ満載の神奈川宿でした。(清田 邦男記)

《神奈川県立博物館見学》

行事区分：会員研修

日 時：11月24日（金）10：30～13：30

場 所：横浜市中区

参加者：会員7名

今回の研修は、神奈川県立博物館で歴史に精通した会員が解説に当たられるとの事でしたので、期待を持って参加させて頂きました。

研修は博物館に着く前から始まり、桜木町駅構内やシアル桜木町アネックス内にある旧横濱鉄道歴史展示「旧横濱ギャラリー」において、日本で最初の鉄道に関する解説をして頂きました。当時実際に走行していた蒸気機関車は何処かの遊園地にありそうな可愛らしいものでしたが、横浜一品川間の29キロを35分で運行していたと知り、時速に直せば約50キロ、当時の人はさぞ驚いたことだろうと、思わずその時の状況を思い浮かべてしまいました。



次に向かった、明治5年に初代の横浜駅が建設された場所では、当時の状況だけでなく、私だけでは絶対に見逃すであろう、原標の場所も教えて頂きました。

お目当ての神奈川県立歴史博物館は、重厚な外観の3階建ての建物でした。話によれば、エキゾチックな側面の道では、建物を背景にコマースの撮影が行われたこともあるそうです。建物内は、1階が特別展示室、2階3階が常設展示場となっていて、3階のテーマ1（古代）から順を追って2階のテーマ5（現代・民俗）まで年代順に見ることが出来るようになっていました。

展示場は、神奈川県歴史博物館ということもあり、神奈川県歴史に深く関わりのある、鎌倉時代が展示されているテーマ2(中世)と、黒船来航のテーマ4(近代)の展示スペースが広く取られていましたが、私達はやはり、厚木市から出土された土器等も展示されているテーマ1(古代)や厚木に関わりのある歴史的人物が登場する鎌倉時代を中心に解説して頂きました。



博物館入口前

展示物を見ながらの解説が、時代背景を含め、ポイントを良く掴んだお話だったうえ、その場で参加者同士の話し合いも出来ましたので、歴史音痴な私にも良く理解できました。(残念ながら私の古びた頭に、いつまで留まっているのかは、いささか自信がありませんが)

真剣に、展示物を見たり解説を聞いたりしていると、時間はあっという間に過ぎてしまい、1階に戻った時にはすでにお昼を回っておりまして。皆さんの顔にも疲れが見え始めたことから、当初見学する予定の特別展示(当日の展示は足柄の仏像)はパスし、ここで研修終了となりました。

特別展示を見たい気持ちも多少残りましたが、素晴らしい解説と参加された皆様の知識のお陰で、本当に有意義な一日を過ごすことができました。(根岸 記)

あつぎ国際大道芸 2023

開催日：11月11日(土)、12日(日)

(撮影：高橋会員)



最近の活動

日付	場所	内容	参加者
11月 3日	飯山地区	企画ガイド 下見 「厚木の巡礼道」	会員 9名
11月 5日	市内5拠点	秋季入込観光客調査	会員 10名
11月 8日	南公民館	創立20周年記念誌編集委員会#8	会員 5名
11月 11日	アミューあつぎ	定例会	会員 24名
11月 22日	宮ヶ瀬湖周辺	企画ガイド 下見 「宮ヶ瀬の紅葉ハイキング」	会員 6名
11月 23日	荻野公民館	企画ガイドの資料読合わせ 「荻野の歴史を辿る」	会員 7名
11月 24日	横浜市中区	神奈川県立歴史博物館 見学	会員 6名
11月 26日	相川公民館	創立20周年記念誌編集委員会#9	会員 4名
11月 28日	横浜市神奈川区	かながわガイド協議会 合同研修・交流会	会員 3名
11月 29日	宮ヶ瀬湖周辺	企画ガイド 「宮ヶ瀬の紅葉ハイキング」	会員 8名
11月 30日	荻野地区	企画ガイド 下見 「荻野の歴史を辿る」	会員 4名
12月 1日	睦合西公民館	創立20周年記念誌編集委員会#10	会員 4名
12月 4日	相川公民館	編集会議	会員 3名

編集後記

江戸から坂東 33 観音霊場の飯山観音を目指して、相模川を渡ってきた巡礼者を案内する為、依知から飯山迄の6カ所にお地藏さんが立っています。企画ガイド「厚木の巡礼道を辿る」シリーズでは1回目は依知から妻田薬師まで、2回目は弘徳寺までが完了しており、11月10日に最終回として飯山観音までのガイドを予定していましたが、残念ながら雨天のため中止になりました。またのチャレンジをお願い致します。一方で11月29日に行なわれた「宮ヶ瀬の紅葉ハイキング」は天候に恵まれ、大勢のお客様と紅葉を見ながら、宮ヶ瀬ダムのお客放流や服部牧場での動物とのふれあいなど楽しい散策が出来ました。ご苦労様でした。

編集委員 阿部 啓冊 小林 直樹 澤田 正弘